

生徒が自ら学ぶ国語科授業のデザイン

—「書く」能力の育成を通して—

法 邑 歩 美

金沢大学大学院教職実践研究科

【概要】「書く」ことへの苦手意識をもつ生徒は多い。自分で表現することを諦めてしまい、学びへの意欲が減退してしまうことに課題がある。本研究は、中学校国語科授業において、「共有」を重視した「作文カンファレンス」の手法を取り入れることで、生徒の作文、「書く」ことへの意識がどのように変化するかを探究した。作文カンファレンスは「題材の設定」「内容の検討」「構成の検討」「推敲」の場面で行うことが有効であった。中でも生徒が最も作文への変容を感じたのは「題材の設定・内容の検討」での作文カンファレンスであり、題材設定時に他者の多様な意見に触れることが、その後作文を書き進めていく上での助けになっていた。また、題材設定における考え形成のために行った週1回の帯学習では、約半数の生徒が、題材設定時に「役立った」と答えていた。作文カンファレンスによって書けない生徒が書けるようになるだけでなく、他者からの賞賛を受ける機会が増えることにより、自分の作文への自己評価が高まることも確認された。

I 問題と目的

1. 問題

(1) 研究の背景

「書く」ことは、他と比べて負担が大きく、苦手意識をもつ生徒が多い。毎年勤務校で行っている意見作文では、題材を生徒自身が設定し作文を書く。その際に題材を設定できず、作文を書き上げることができない生徒が一定数いる。中学校学習指導要領解説・国語編では、「書くこと」の学習過程として「題材の設定、情報の収集、内容の検討、構成の検討、考えの形成、記述、推敲、共有」が示されている。しかし、現場では「書くこと」は「読むこと」との複合単元で扱われることが多く、題材の設定は教師が行うことが多い。そのため生徒が題材設定をする機会は圧倒的に少ない。教師から与えられた題材について考えることになるため、生徒は受け身になることが多く、自ら学ぶという姿勢も育まれにくい。

この点に「書くこと」の課題があると考えられる。

(2) 「書く」ことにおける「共有」

「書く」学習過程の1つに「共有」がある。「共有」は「読み手からの助言を踏まえて、自分が書いた文章のよい点や改善点を書き手自身が見いだす」ことである。さらにこの「共有」は「書く」学習過程のあらゆる過程で行うことが求められている。しかし、多くの現場では作文が書き上がった「推敲」の段階での「共有」が行われ、作文途中での「共有」は少ない。そのため、作文を苦手とする生徒は教師からの助言やワークシートによる支援に頼るしかない。しかし、それが生徒の求めに合っているとも言い難い。従来の足場かけとして行われていた方法では、生徒の求める支援を行うことに限界がある。

(3) 作文カンファレンス

「書くこと」の先行研究として、協働的な学びを重視した大内(2001)の「共同推敲」の

実践や木村(2008)の「作文カンファレンス」の実践等がある。「作文カンファレンス」は1980年代にアメリカのドナルド・グレーブスらが始めた「作文検討会」のことである。自分1人で作文を仕上げるのではなく、作文を書き進める過程で、アイデアや草稿を誰かに話したり、読んでもらったりする。3～5名のグループで行い、書き手は自分の作文について話し、聞き手はその作文に対して意見や感想を述べる。

「書くこと」には、自分の書いた文章を読み手として評価しながら書き進めることが必要である。つまり、自分自身で読み手の状況を設定し、読み手の思考を想像しながら書き進めなければならない。しかし、「書くこと」を苦手とする生徒にとって、文章化し、読み手のことも想像するという2つの作業を同時に行うことは大きな負担である。この負担を軽減するには、「書く」過程で他者からの指摘や助言をもらう「作文カンファレンス」が有効であると考えた。「共有」を随時取り入れることで、常に読み手を意識しながら書くことができる。その過程で、自分の文章をモニタリングできるようになるだろう。

また、従来の教師による支援、ワークシートによる「足場かけ」と比べ、生徒自身が「書く」過程で疑問に思う部分を直接相手に聞けるという点で、求める支援を受けやすくなる。他者の意見を取り入れ、表現や内容を吟味しながら書くことで、相手意識が育成される。言葉による伝わり方の違いにも気付く。その結果、作文内容の質向上や協働的な人間関係の構築が促され、自分の言語表現を改善しようとする態度の育成に結びつくと考えられる。

ただし、従来の「作文カンファレンス」の実践では「共有」は重視されているものの、教師側が題材設定をしていることが多く、書く題材そのものを生徒が設定する「題材の設定」の指導においてどのような手立てが有効かについては言及されていない。

(4) 「題材の設定」への支援

実生活における書く行為は、書き手の伝えたいという意欲がなければ行われない行為である。書く内容(題材)に対して生徒がどれだけ当事者意識をもって取り組めるかが重要である。そのためには、生徒自身が実生活の中で興味のあることを見出し、それを「書くこと」と結びつけていく必要がある。日頃から様々な題材に触れ、自分の考えを持つ経験を重ねることで、興味を広げ、高めていくことができ、生徒の書く意欲に繋がると考える。

2. 本研究の目的

「書くこと」において、「共有」を充実させた協働学習が、生徒の作文にどのような変化をもたらすのか明らかにすることを目的とする。

II 研究方法

1. 研究対象

石川県内公立中学校 2年生 117名

2. 研究計画

(1) 帯学習

以下の3つを目的とし、4月中旬より週に1回の帯学習を設定した。

- ・「題材設定」に向けての知識を増やす。
- ・「書く」活動で行う協働学習に向けて、グループ活動に慣れる。
- ・身の回りの出来事に興味をもち、自分の意見を持てるようにする。

朝学習の10分間に新聞記事を1つ読み、その記事について自分の考えを記述する。国語の授業の冒頭10分間を用いて、記事についてグループで話し合い、グループの代表者が出た意見を発表する。

(2) 国語授業の「書く」研究対象単元

	単元名	字数	題材
実践Ⅰ 5月	枕草子 (6時間)	自由 縦罫線 を使用	自分流 枕草子
実践Ⅱ 7月	意見作文 (5時間)	1200～ 1600 字	自由選択 字

実践Ⅲ 11月	適切な根拠 を選んで書 こう (5時間)	800字 程度	環境問題
------------	-------------------------------	------------	------

どの単元においても生徒自身が「題材設定」をしなければならないものとした。また、「共有」による生徒の作文の変容が見られるよう、作文に多様な考えが出る単元を選択した。

3. 検証方法

抽出生徒のワークシートと作文を分析し「書くこと」における「共有」協働学習の効果を検証する。特に、作文カンファレンスにおける生徒同士の対話を録音し、協働学習が生徒の作文にどのような影響を与えたか分析する。さらに生徒が最も困難を覚える「題材設定」において、帯学習での取り組みが「書くこと」における生徒の「題材の設定」にどのような変化をもたらしたかを、ワークシートと振り返りから分析する。

なお、抽出生徒は以下の観点を用いて6名を選んだ。

- ・実践Ⅰ（「枕草子」自分流枕草子を書こう）において自分の書きたいことを明確に書けているかどうか。
- ・1学期中間テストに出題した200字作文において、資料をもとに根拠を見出し、主張を明確に書けているかどうか。

生徒A・Bは両者とも十分に書けている生徒、生徒C・Dは実践Ⅰでは書けているものの中間テストの作文になると根拠が乏しい生徒、生徒E・Fは両者ともに不十分な生徒である。抽出の際には学級の偏りが出ないように考慮した。

Ⅲ 実践経過

1. 帯学習

(1) 取り上げた題材

帯学習に用いる新聞は生徒にとって身近な情報が載っている地方新聞の朝刊を用いた。実際に帯学習に使用した新聞記事の概要は以下の通りである。

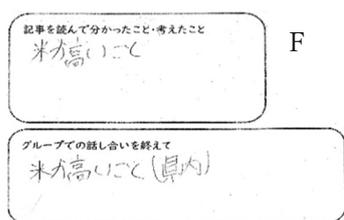
	題材	掲載日	白紙率
①	県産米の値下げ	4/9	1.8%
②	大阪万博の待ち時間	4/16	0.0%
③	就職面接へのAI導入	4/22	1.8%
④	北陸新幹線の延伸先について	5/2	6.0%
⑤	駅前にライブホール建設	5/9	6.6%
⑥	高齢者の交通事故 逆走	5/15	4.7%
⑦	女性役員の割合3割どまり	5/18	3.9%
⑧	中学部活平日は週3日へ	5/30	3.0%
⑨	石川県の出生率	6/5	4.0%
⑩	金沢百万石まつり	6/8	5.5%
⑪	備蓄米転売	6/14	0.0%
⑫	流言 県内訪日客への影響	6/26	1.9%
⑬	熱中症での死亡者数	8/19	4.1%
⑭	アフガニスタンでの地震	9/4	7.8%
⑮	イノシシによる被害	9/11	6.0%
⑯	能登の地価下落	9/17	2.9%
⑰	マグロの豊漁でスルメイカに影響	9/24	3.9%
⑱	ノーベル化学賞	10/9	2.9%
⑲	日本の二季化	10/12	2.1%
⑳	神社にクマ出没	10/23	1.0%

ワークシート④までは「分かったこと・考えたこと」、⑤以降は「なるほど!と思ったこと、疑問に思ったこと」を朝学習時に書き、それを元に授業で話し合い活動を行った。②からはグループでの話し合いの観点を示し、何について話し合ってほしいかを明確にした。話し合い後には、「グループでの話し合いを終えて」の部分に生徒が考えたことを記述し、考えを蓄積した。白紙率は、ワークシートへの記述がなかった生徒の割合である。生徒にとって身近で、自分でも課題であると考えられることができる題材の場合、自分の考えを記述する割合が高く、白紙率が低くなっていた。

(2) 抽出生徒の様子

生徒A・Bはどの新聞記事においても、ワークシートに自分の考えを書くことができ、グループでの話し合いでも自分の考えを伝えることができている。生徒C・Dは記事の内容によって記述量に差が見られる。生

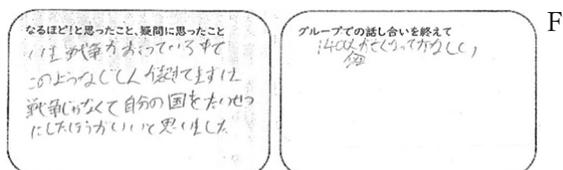
徒E・Fは資料1に示すように、どの回のワークシートも記述の内容・量が乏しい。



〈資料1：①帯学習ワークシート〉

⑫のグループでの話し合いの録音データを確認すると、生徒Fは話し合いで「なんもわからん」と発言し、他のメンバーもそれに対してフォローする様子が見られなかった。グループ活動後に声をかけると「SNSの情報が全てではなかった」と発言しており、全体での交流後、ワークシートに「こんきょがない事を世に流してこんらんさせるのはよくなくてそのデマで子どもがSNSで見えたりしておびえたりしたらたいへんだからうわさをのせたらダメであと流されないようにしたらいいと思います(原文ママ)」と記述していた。生徒Fも含め数名の生徒は、新聞記事の内容を読み取れていないため、グループ活動でも何について話せばいいのか分からないようだった。

同じグループの生徒も、記事の内容を正しく読み取れているのか自信がなかったため、フォローもできていなかったと考えられる。それを受けて⑬より、通常版の新聞記事に加え、記事の要約版を用意し、両面に印刷した。⑬以降は生徒E・Fともに要約版を使用している。特に生徒Fの読み取り後の記述はただの情報の書き抜きから、自分の考えを入れた記述へと変化している(資料1・資料2)。要約版を使用することにより、内容読解の負担が軽減し、考えをもてるようになったと考えられる。



〈資料2：⑭帯学習ワークシート〉

(3) 帯学習の効果

実践Ⅱ「意見作文」の第1時において授業アンケートを行った。生徒は「これまでの週に1回授業で行ってきた『新聞記事を読み、グループで話し合う活動』は、意見作文の題材やテーマを決めるときに役に立ちましたか。」という項目に「はい」か「いいえ」で回答した。「はい」と答えた生徒は、『「はい」と答えた人は、どんな点で役に立ちましたか。具体的に書きましょう。』という項目にも答えた。

対象生徒のうち45.8%の生徒が「はい」と回答していた。その理由として「今の社会の問題について知った」「どんなテーマにするか迷っているときに役立った。」「自分では触れようと思わないテーマについて考えることができた。」「読解力がついた」「思ったことを上手く言語化できるようになった。」などが挙げられていた。

(4) 考察

上記のアンケートの結果から、帯学習の取り組みは生徒が「題材設定」をする上で一定の効果を上げていたと考える。実践Ⅱ「意見作文」において抽出生徒D・Fは、もともと書きたい題材が決まっており、意見作文の題材設定で苦勞していなかったため、アンケートで「いいえ」と答えていた。また、抽出生徒Eは、実際に題材として選んだのは「インターネットにひそむ怖さ」と、帯学習⑫との関連性が高かった。題材設定の際に、帯学習での記事や自分の考えを記録したメモを見ることで、考えが深まり、題材設定の助けになっていたと考えられる。

また実践Ⅲ「適切な根拠を選んで書こう」に向けて環境問題を扱った結果、約3割の生徒が意見文の題材として帯学習で扱った題材を採用していた。

2. 実践Ⅰ 枕草子 自分流「枕草子」

(1) 実践内容

実践Ⅰでは以下の通り実践を行った。

次	時	授業内容	作文カンファレンス
一	1	単元のゴール、「枕草子」について知る。	
二	1	「枕草子」第1段 春夏の読解	○情報の収集
	2	「枕草子」第1段 秋冬の読解	○情報の収集
	3	第145段、第216段読解	○情報の収集
三	1	自分流「枕草子」を書く	○内容の検討
	2	自分流「枕草子」を書く	○推敲

第一次で教師作成見本（資料3）を示し、「枕草子」について概要を学習した。見本提示時には単元のゴールも伝えた。「自分流枕草子」を伝える相手を清少納言と想定し、「自分らしさ」と「現代らしさ」を意識して書くことを確認した。教師見本の下線部は自分らしさが伝わるように気持ちが書かれた部分であり、囲みは現代らしさが伝わる言葉を使用している部分である。

冬は雪。
子ども達にとってはうれしい雪も大人にとってはやっかいもの。車のタイヤをスタッドレスタイヤに履き替え、朝はいつもより早めに出勤。出勤前と帰宅後の除雪作業で筋肉痛になる日々。除雪作業後に温かいエアコンのついた部屋で食べるパナライスは至福の一品。でも、暖冬になって除雪が必要ない年の方が正直嬉しい。

〈資料3：教師見本のうち一部〉

第二次の章段の読み取りでは、題材設定時の「共有」を目的として「自分だったら何を『をかし』『うつくし』とするか」を提出し、クラスごとにワードクラウド（資料4）を作成した。



〈資料4：ワードクラウドの一例〉

第三次では「自分流枕草子」を作成し、グループで作文カンファレンスを行った。

（2）抽出生徒の様子

【生徒A：題材の具体化】

第三次1時の作文カンファレンスでは春は半分まで、夏と秋は題材のみ書かれていた。そのため、グループのメンバーで作文を読み合ったが、すぐに作文カンファレンスは終わってしまい、「とりあえず書こう」という他の生徒からの声かけによって黙々と作文を書き進めていった。途中、生徒Aに対してグループメンバーから2回質問があった。「银杏って秋やよね?」「これって『枕草子』みたいにせんでいいよね?」という質問である。それに対し生徒Aは「うん。」と答えていた。質問していた生徒の作文には秋の部分に银杏が取り入れられていた。

録音データからは作文の変容につながる対話は見られなかったが、生徒Aが実際に書き上げた作文を見ると、「夏休み」「体育祭」「文化祭」「おせち」など当初生徒Aが季節らしさを表すものとして選んでいなかった題材が取り入れられている。ここから、「題材設定時」に作成したワードクラウドからの影響を受けていることが分かる（資料5）。丸囲みの部分がワードクラウドからの影響を受けたと考えられる項目である。

枕草子
清少納言に倣える、自分流の枕草子を書こう。
1人々を魅了する表現とはどのようなものだろうか

春は 出会い。
新しい教室で新しい友達に会おう大切な時期。新しい友達がたくさんでき、いろいろな人に出会おうとできる楽しい不安な季節。
夏は 夏休み
一年の中で一番休む長い夏休み。それかともつれい。部活も少なくて、楽しく、満喫して過ごせる四十日間。
秋は イベント。
体育祭は文化祭の学校行事がハロウィンやイベントが大好き。秋。気遣い、ちやうどよく、おちつく季節。
冬は 正月。
家で家族とゆくりする正月。一月一日にはお年玉がもらえるおせちや正月の食べ物もたくさんある嬉しい季節。

〈資料5：生徒A 自分流「枕草子」完成稿〉

【生徒E：「書けない」への支援】

生徒Eは、アイディアはたくさん浮かぶが文章化することが苦手な生徒である。授業時間内では作文を書き上げることができなかった。作文カンファレンス時は、夏の部分は書

しように話している様子が見られた。特に冬の部分は、同じグループメンバーでよさを語り合い、生徒Fが他の生徒に自分の考えを繰り返し伝えていた内容である。そのため、題材が「野球」以外のものになっている（資料9）。作文カンファレンスで友達と語り合う中で、書きたいことが次々と出て記述量の増加に繋がったのだと考えられる。

（3）考察

抽出生徒6名のうち5名が授業で紹介したワードクラウドを活用し、自分流「枕草子」を書き進めていた。また、自分流「枕草子」を5段階で自己評価をさせたところ、生徒B・Fは5、生徒C・Dは4、生徒A・Eは3と評価していた。自己評価の高かったB・Fは自分で決めた題材で書けたことが共通点として挙げられる。また、生徒B・Dは作文カンファレンスの中で、他の生徒から「いいね」「すごい」「わかる！」という賞賛を受けていた。これも自己評価の向上に繋がったと考えられる。

自分流「枕草子」に何を書くか決める前段階の【情報の収集】で、多様な考えに触れる機会をもつことが、その後の作文の出来を左右していた。また【記述】段階での交流では、ある程度書けている状態、かつ互いの作文を賞賛し合える人間関係であることが重要である。まだ書けていない時にはグループ活動を行うよりも、周囲と気軽に相談できる状況を設定する方が有効であった。第三次2時の【推敲】では、誤字脱字など表記面での推敲はできていたものの、作文の内容面である「自分らしさ」「現代らしさ」の検討が不十分であった。特に生徒にとって何が現代らしいのかが明確になっていなかったため、作文を賞賛し合うだけのグループ活動が多かった。「どうなっていることが、現代らしさが表れているといえるのか」具体例を示し、生徒同士で評価できる工夫が必要である。ただ、作文カンファレンスにおいて友達から自分の作文を賞賛

された経験は、作文への自己評価が高まり、書くことへの意欲や自信に繋がるものであったと考えられる。

3. 実践Ⅱ 意見作文

（1）実践内容

実践Ⅱでは以下の通り実践を行った。

時	授業内容	作文カンファレンス
1	見通しをつかむ。 書く題材について検討する。	○情報の収集
2	題材・主題の決定。 構成メモを作成する。	○内容の検討 構成の検討
3	記述(Googleドキュメントを使用)	○内容の検討
4	記述	○推敲
5	記述・推敲	○推敲

第1時に昨年度の「少年の主張」優秀作品を読み、どのような作文が人々の心を動かすのかを確認した。その後、自分が書きたいと思う題材についてマッピングをし、アイデアを広げ、題材と主題を決定した。第2時の構成メモ作成では序論、本論、結論に何を書くのかを箇条書きでメモした。序論には「相手を引きつける工夫」として問かけや問題提起、データの提示のいずれかを使うこと、本論では自分の体験を根拠として取り入れること、結論では序論と本論のつながりを意識して、自分の主張を書くことを確認した。第3時から第5時の「記述」では、「書くこと」への負担を軽減するため、Googleドキュメントを用いて作文を書いた。また、毎時間「作文カンファレンス」を取り入れ、互いに交流する場を設けた。授業の終末5分にGoogleフォームで振り返りを行った。

（2）抽出生徒の様子

【生徒E：題材設定への影響】

「自分流枕草子」では、何を書くのかなか決められなかった生徒Eは、今回「インターネットに潜む怖さ」という題材で書く内容をすぐに決められた。本人は自覚していなかったものの、これまでの帯学習の中で取り上げた内容であった。話し合いで考えをもつ機会を多く設定してきたことが題材決定に影

響したと考える。構成メモを考える段階では、何を根拠にすればいいのかで悩んでいたが、生徒Eはブックトラックに用意された書籍から本論に取り入れる根拠を探し、複数の事例を提示した作文を書いた。

これまで、なかなか作文が書けなかった生徒Eが作文を書けたことは大きな成長である。作文カンファレンスにおいても、どんな情報を元に書いているのかグループの生徒に説明している様子が見られた。

【生徒A：書く内容の明確化、思考の広がり】

生徒Aは題材を「生命」に設定し、作文カンファレンスでも同じ題材を選んだ生徒と交流した。「生命」について選んだ生徒が少なかったため、ペアでの交流となり、互いの作文を見ながら書き進めている様子が見られた。構成メモについて交流している場面では、どのような方針で書き進めるか確認し合っていた。相手に自分の作文の内容を伝えるうちに、何について書くのか明確になっていった。自己評価においても「今日のグループ交流で、あなたの作文(作文を書くまでの考え形成も含む)に変化はありましたか。」という質問に対して「はい」と答えており、その理由として「同じ題材の人たちと交流して考えが広がった。」と記していた。第2時での作文カンファレンスでは、以下のやりとりがあった。

〈生徒A：第2時作文カンファレンスの様子〉

S	うんと、私のテーマは殺処分で、殺処分の現状と殺処分される理由書いて、結論には殺処分、殺処分数減少のために自分達ができること。
生徒A	テーマが死亡者数が増えるってことで、その原因として、で、高齢化や戦争とか、について。はい、まとめていろんな原因があるって書きます。
S	おっけい!

生徒Aは単元末の振り返りでは、「【意見作文③④】作文を書く場面(記述)」での交流が最も自分の作文に影響を与えたと答えていた。第5時の推敲の場面では、ペアの相手から「問いかけをすることで読者にしっかり考えさせているのがいい工夫だと思いました」とコメントをもらっていた。一方、生徒Aは「具体

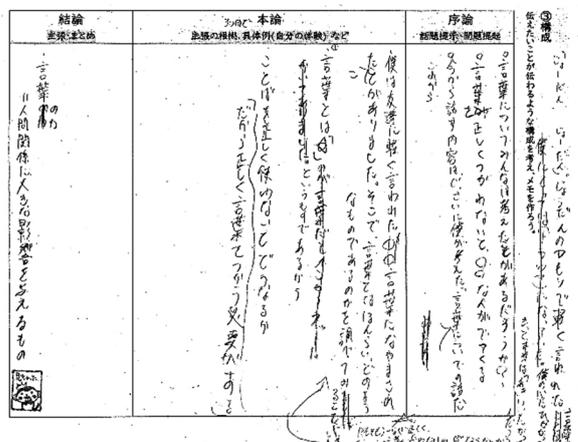
例をしっかりと書いていていいと思いました」と相手にコメントしていた。仕上がった作文〈資料10〉は授業でねらいとしていた、【序論】で「相手を引きつける」、【本論】で「自身の見聞や体験を元にした根拠を入れる」、【結論】で「本論の根拠を受けて自分の主張を明確に書く」の3点を押さえて書かれていた(下線部はそれらが見られる部分)。

【序論:抜粋】 「命とは君たちがもっている時間である」 これは日野原重明さんという医者が使っていた言葉です。...
【本論:抜粋】 時々、ニュースで年々死亡者数が増加していることを耳にします。(中略)自殺による死亡率も年々増加しています。インターネットによると、特に15歳から39歳の死因の第1位が自殺となっています。...
【結論:抜粋】 ...命を大切にすることは時間を大切にすることでもあり、一瞬一瞬大切に、自分のことだけでなく他の人の気持ちも考えて支え合っていくことで少しでも他の人の命が救えるかもしれません。当たり前前の時間がいい思い出になるように。

〈資料10：生徒A作文より抜粋〉

【生徒D：アドバイスによる書き方の工夫】

生徒Dは、当初から「言葉」を題材にして意見作文を書く決めていた。作文カンファレンスではペアの相手から「なんかあ、あの言葉によって人を傷つけてしまうみたいなこともいいんじゃない？」とアドバイスも受けた。それを受け、ワークシートの欄外に、言葉によって傷つけられた経験を書き足した〈資料11〉。



〈資料11：生徒D 構成メモ〉

その後【序論】にそのアイディアを採用し、意見文を書き進めている〈資料12〉。

「じょーだん、じょーだん」冗談のつもりで軽く言われた言葉が僕の心にひっかかっていました。きっと本当は、違うことをいいたかったんだろう。

〈資料 12：生徒 D 作文より抜粋〉

推敲時にはペアで作文を読み合い、改善点を意見文に記録していた。生徒 D の自己評価は 5 段階中 5 で、その理由として「去年以上に深く考える事ができたし、ネットで調べたことを自分なりの言葉に言い換えるなど、書き方の工夫ができたから。」と記していた。

【生徒 F：記述量の増加】

生徒 F は意見作文の題材を「野球のピッチャー」に決めたが、そこから何を伝えたいのかが決まらず、作文を書き進めることができなかった。作文カンファレンスではグループの生徒からその点に関して「野球か。野球でどういう問題にたどり着くん？」と質問されていた。その後のやりとりの中で生徒 F は「ピッチャーをしたいです。」と発言し、それを受けて他の生徒から「現実的になんかピッチャーなりたいけど、例えば、練習、それで、練習しても、他にうまい人おって」と具体的にどのような内容で書けば良いかのアドバイスを受けていた。しかし、生徒 F は作文カンファレンスを受けてもすぐには作文を書けなかった。結果的に生徒 F が提出した作文は、規定の字数に少し足りなかったものの、自分の体験や思いが書けており、「自分流枕草子」と比べても記述量は増加していた〈資料 13〉。

僕は小学 2 年生のときにお兄ちゃんの影響で野球を始めました。そして 4 年生ぐらいからプロの試合を見て僕もプロ野球選手になりたいと思いました。そしてピッチャーでプロ野球選手になるためにはいろいろなことをしないとダメだと思いました。どうしてかというところプロ野球選手も努力してプロ野球選手になっているからです。僕はこのことからピッチャーで活躍するためには何をすればいいか考えました。

まずピッチャーの一番重要と言っても過言ではないことは球速を上げることです。そのために、いちばん重要なことはトレーニングをすることです。そしてトレーニングにもいろいろな種類のトレーニングがあって下半身のハムストリングスなどの大きな筋肉を鍛える(スクワット ラウンジ)などのトレーニングや上半身を鍛える、特に(腕立て伏せ ロシアンツイスト プランク)などのトレーニングなどいろいろなものがあります。あと他にも体幹を鍛える体幹トレーニングなどもあります。そして球速を上げるためにはトレーニング以外の方法にもあります。それは投球フォームをより良くする

ことです。投球フォームを改善すると 1 番は球たまが速くなったり、投球フォームを改善したことによって肘や肩に負担がかかりにくくなって怪我をするリスクを減らせます。他にも制球が良くなるということもあります。

そしてラストに球速を上げる方法として柔軟が挙げられます。柔軟をすることによって平行移動が楽になって球速が上がります。そして腰などのいろいろなところの怪我予防にもなります。

ここまでが主な球速を上げる方法です。でも球速を上げる以外にも重要なことがあります。それは制球を良くするという事です。

そして制球をよくするために必要なことは実は先程の球速を上げる方法と同じで、まず下半身などの足腰を鍛えることが特に重要です。やっぱりピッチャーで重要なのは足腰だということがここまでよくわかります。他にも球速を上げる方法と同じで体幹トレーニングやフォームの改善などがあります。

ここまで球速と制球を見てきましたが、それ以外にも重要なことはまだまだたくさんあります。これらからわかることとしてプロで活躍するにはきつくて筋トレなど他にも色々なことを頑張るって自分に負けないように努力したいと思いました。だから僕はこれらを踏まえて、自分の目標に向かってこれから頑張るってプロ野球で活躍できるようにもっともっと頑張ります。

〈資料 13：生徒 F 意見作文〉

記述量が増えた要因として、意見作文が夏休みの課題として課され完成までに十分な時間が確保されていたことが大きい。さらに、授業で書くための手立てを多数用意し、作文カンファレンスで具体的なアドバイスを受けてたり、他の生徒の意見文に触れ具体例を確認できたりしたことも大きく影響していると考ええる。

(3) 考察

以上に述べてきたように、作文カンファレンスによって生徒の作文に様々な効果が見られたが、以下の 4 点が課題として挙げられる。

① 論理の一貫性

生徒 E の意見文は、本論にインターネットに関する問題として「歩きスマホ」や「インターネット上の詐欺」、「インターネットでのいじめ問題」など事例が紹介されていた。しかし、全体として何を主張したいのかが明確ではなかった。規定の字数を書くために、見つけた事実を書き続けた結果、このような作文になってしまったのだと考えられる。結論で自分の主張を導くために、どのような本論を書けばよいのか、生徒自身で考えられる手

立てを用意する必要がある。

②自己評価の低さ

生徒が自ら学ぶ授業にするためには、生徒自身ができたという実感を持つことが重要である。しかし、生徒Aの自己評価をみると5段階中2と低かった。その理由として、「意見があまり思うようにまとめることができなかつたから。(原文ママ)」とあり、教師評価と生徒の自己評価に差が見られる。友達からの賞賛だけでは自己評価が向上しなかつたことが分かる。生徒が「書く」ことに自信を持ち、意欲的に書き進めていくためには、この差を無くしていくことが大切だと考える。

③推敲の質

多くの生徒が「推敲」段階での作文カンファレンスに効果を感じていた。しかし、せっかく行った推敲が生かされていない場面も見られた。生徒Dはペアで推敲していたが、完成稿にその推敲が反映されていない箇所があった。また、情報の妥当性についても検討の余地がある。出典が明記されていなかったり、AIによる情報をそのまま引用したりしていた。生徒だけの交流では、情報の妥当性について言及せず、表記のみの推敲にとどまってしまうことが分かった。実践Ⅲで、より説得力のある文章にするためには何が重要か、生徒自身が気づける手立てを用意したい。

④相手意識の育成

自分の思いや調べた情報は書いてあるものの、読み手に対する意識が低い意見作文が数点見られた。生徒Fの作文は、問題提起や相手への問いかけがなく、自分の考えを書き連ねた文章になっている。「書く」とは、本来相手に伝えるための行為である。伝える相手を常に意識し、読み手に「～してもらいたい」という意図をもった作文を書かせたい。

(4)実践Ⅲに向けて

生徒の多くが、これまでに行ってきた帯学習で使用したワークシートを参考にして題材設定をしていた。

単元末の振り返りで「どんな場面で行った交流が、自分の作文に影響を与えましたか。

(複数回答可)」という項目でアンケートを取った。抽出生徒のアンケート結果は以下の通りである。

生徒A	記述
生徒B	内容の検討
生徒C	題材の設定
生徒D	推敲
生徒E	推敲
生徒F	構成の検討、推敲

推敲を選んだ生徒が多いのは、推敲によって、自分の作文への影響を視覚的に実感できたからだと考えられる。しかし、生徒によってどの段階での交流が影響を与えたかにはばらつきがあった。また、推敲の段階で交流することで誤字脱字の訂正はできていたが、内容にまで言及しているペア・グループは少なかった。そのため、課題①③で挙げたような問題点が見られた。これは、意見作文を書き進めていくうちに、何が重要であるのか、自覚し続けることができなかつたためであると考えられる。実践Ⅲでは、根拠を明確にして書くことをねらいとした。主張を常に意識し、それに見合った根拠を提示して記述することを大切にした。また、実践Ⅱでは毎時間作文カンファレンスを行ったため、書くための時間が減ってしまった。実践Ⅲで記述の時間をどう確保するのも考慮して進めていくことにした。

4. 実践Ⅲ 適切な根拠を選んで書こう

(1)実践内容

時	授業内容	作文カンファレンス
1	課題・意見を決定する。 (ワークシート使用〈資料17〉)	◎題材の設定 内容の検討
2	意見を支える根拠を探し、 根拠・理由付けを明確にする。 (ワークシート使用〈資料17〉)	◎情報の収集 内容の検討
3	構成メモ作成(オクリンク+を使用) 記述(オクリンク+を使用)	
4	記述	○記述 (1/3クラス)
5	記述・推敲	○推敲 (2/3クラス)

(作文カンファレンスでの◎は全クラス実施、○は表記のクラス数で実施)

実践Ⅲは、説明文「モアイは語る―地球の未来―」との複合単元として扱った。「モアイは語る」の導入で「地球の未来はどうなると思うか」という問いに対して、生徒は「明るい・暗い」の二択から選び、その理由を答えた〈資料14〉。

地球の未来は？

明るい(よくなる) 暗い(悪くなる)

【理由】

地球を悪くしているのは人間だけど、地球をより良くできるのも人間だから。

地球の未来は？

明るい(よくなる) 暗い(悪くなる)

【理由】

建物を建てたりするときも森林を伐採したり、ゴミのポイ捨てなどしている。さらに日本は火力発電など二酸化炭素を大量に出したりしてたりと環境に悪いことしているから。

〈資料14：「地球の未来」に対するの生徒意見〉

その後、意見文の見本〈資料15〉と、作成時に使用した資料を提示した。単元のゴールとして書く意見文は、字数を600字から800字とし、題材は「環境問題」から自分が最も解決しなければならないと思うものを選ぶよう指示した。

地球の未来を救うために
 今、地球は温暖化が深刻な問題になっています。平均気温が毎年上昇し、自然災害も増えています。CO2削減が重要で、100年以内に気温が1.5℃以上上がるのを防ぐ必要があります。個人でもできることは、省エネやリサイクル、公共交通機関の利用です。政府や企業にも責任があり、再生可能エネルギーの普及を促す政策が必要です。私たち一人ひとりが意識を高め、行動を起こさなければなりません。未来は私たちの手で決まります。地球を救うために、今すぐ行動を起こしましょう。

〈資料15：意見文の見本〉

生徒は、「モアイは語る」で筆者がどのように論を展開しているのか、「意見・根拠・理由付け」を図式化して整理できるワークシート〈資料16〉を使用して読解した。

モアイは語る ―地球の未来― ワークシート 編 者 氏 名

意見

地球の未来 イースター島の(のような)運命は、私たちにも無縁なことではない。

理由づけ

↑

根拠 イースター島で起きた出来事			
暗い①	暗い②	暗い③	暗い④
① 【意見】	② 【意見】	③ 【意見】	④ 【意見】
【根拠】	【根拠】	【根拠】	【根拠】

〈資料16：「モアイは語る」ワークシート〉

実践Ⅲでは、より論理的な文章が書けるよう、ワークシート〈資料17〉を使用した。

適切な根拠を選んで書こう ワークシート

課題

意見

理由づけ

根拠2

根拠1

適切な根拠を選んで書こう ワークシート 見本

課題

地球温暖化が進み、平均気温が上昇してしまう。

意見

一人一人が省エネや資源の有効活用を進めていこう。

理由づけ

クールシェアや家庭・学校でのエアコンの設定温度を最適化することが、省エネに大きくつながる。

根拠2

夏、冬に電気の使用量が増加する。冷暖房を使用しているためである。(東京・ワーグリップHP 2024年6月26日コラムより)

根拠1

日本のゴミの排出量は1人当たり年間311kg。1日当たり851グラム。(Global Waste Index 2025 (Sensoneo社)より)

〈資料17：意見文ワークシートと教師見本〉

記述の時間を確保するために、実践Ⅲでは、単元の流れを示した後、「どの時間に作文カンファレンスをしたいか」生徒に事前アンケートを取った。実践Ⅲでは生徒の意向を取り入れて希望する場面で作文カンファレンスを実施した。

(2)抽出生徒の様子

【生徒E：論理の一貫性】

実践Ⅱで、具体例を羅列し根拠が曖昧になってしまっていた生徒Eの作文は、実践Ⅲで大きく変化した。

第1時は欠席だったため、生徒Eは第2時から意見文の題材を考えていった。環境問題に限定していたこと、前回までにクラスメイトが考えた課題と意見を一覧にして提示していたこともあって、生徒Eは第2時で課題と意見、理由づけを1つずつ書くことができた。

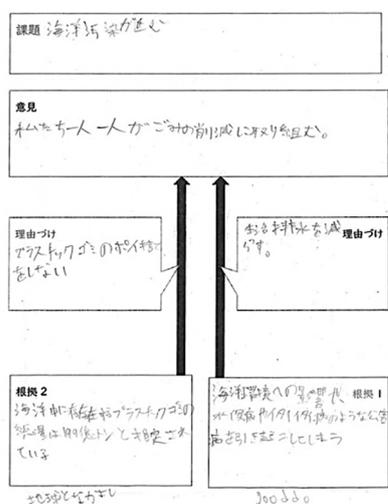
第2時に行った作文カンファレンスでは、生徒Eは以下のように自分の意見文の課題、意見、理由づけを語っている。途中司会の生徒に発言を遮られた場面もあったが、その後自分の考えを最後まで述べ、意見文の概要を相手に伝えようとする意欲が感じられた。

〈生徒E：第2時作文カンファレンスの様子〉

S1	まずは、S2さんから、言ってください。
S2	はい。…っと、僕はゴミ捨て、僕はごみをポイ捨てすることによって、多くの森林が減ってしまうと思います。だから、地域ごとに〇〇(聞き取り不能)を大切にしたいです。どうしてかというゴミのポイ捨てにより、地球

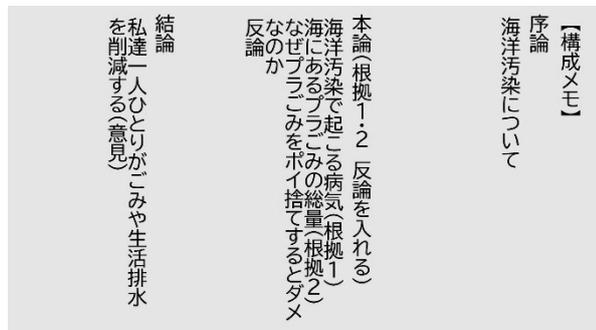
S1	温暖化や水質汚染や…えっと土壌汚染や海洋汚染、の可能性があるからです。
生徒E	じゃあ次は、えっと、Eさんお願いしまーす。はい。課題は海洋汚染が進むで、意見は私達一人一人がゴミの削減に取り組む。
S1	はい。
S2	分かりました。(拍手)
生徒E	理由付けがプラスチックごみなどを捨てない。
S3	はい。
S2	はい。
S1	なるほどー!(拍手)すごい。

生徒Eは作文カンファレンス時には理由づけを1つしか書いていなかったが、同じグループにいたS1が同じ題材を選んでいて、S1が話していた理由の1つである「水質汚染」を糸口にしてさらに根拠を調べ、ワークシートを仕上げる事ができた(資料18)。



〈資料18：生徒E ワークシート〉

第3時に作成した構成メモを見ると、前回のワークシートの内容に加え、「なぜプラごみをポイ捨てするとダメなのか」と読み手の思考を想定した内容を取り入れて構成を考えている(資料19)。



〈資料19：生徒E 構成メモ〉

第5時では、作文カンファレンスを授業の前半に取り入れた。生徒Eは同じグループの

生徒作文に対し、「読み手に問いかけるような感じでいいと思いました。」と評価している。生徒Eの作文にも読み手に問いかける文章があり、このように評価できたのは、生徒E自身が読み手を意識して意見文を書いていたからであるとする。実践IIの意見作文では情報の羅列で何を伝えたいのかが明確ではなかったが、今回の意見文では主張が明確に記されていた(資料20)。

いま地球では海洋汚染が深刻な問題になっている。人間の活動が原因で、プラスチックごみ、油、生活排水や工場排水などが流れ込み、海の環境が悪化する。毎年何百万トンものプラスチックごみが海に流れ込んでいる、私たち中学生がこの海を守るためどのようなことをしていけばよいのか。
 「世界と仲良し」のデータによると世界では、毎年少なくとも800万トンものプラスチックごみが海に流出していると推定されています。そして現在の海洋中に存在するプラスチックごみの総量は199億トンと推定されており、このままいくと2050年には魚の量よりもプラスチックごみの量が多くなると予測されています。私達が海洋プラスチックごみを減らすために出来ることはマイバックやマイボトルの使用、プラスチック製品の利用を減らす、リデュース。そしてごみの正しい分別をするリサイクルが大切です。

〈資料20：生徒Eの作文の一部〉

【生徒A：自己評価の向上】

実践IIでは自己評価が低かった生徒Aは、実践IIIでは作文の出来を5段階中4と評価した。その理由として、「根拠と反論をしっかり書くことができたから。」と述べている。自己評価が高まった理由としては、第3時の記述で事前に推敲のポイント(評価規準)(資料21)を示したことで作文カンファレンスでそれを元に話し合いをしたことが影響したと考えられる。

【推敲のポイント】←評価の観点

記述面

- ①誤字脱字がない
- ②文法的な誤りがない(主語述語の対応、話し言葉×)
- ③一文の長さ20字～40字
- ④文末の統一(常体・敬体)
- ⑤漢字を適切に使っている(ひらがなばかり×)

内容面

- 【序論】
- ⑥読み手を引きつける工夫がある(問いかけ・問題提起など)
- ⑦選んだ環境問題の課題をきちんと理解し、伝えられている
- 【本論】
- ⑧根拠が明確(データがしっかりしている)で出典が明記されている
- ⑨根拠と意見の結びつきに矛盾がない
- ⑩読み手を想定した反論を考え、反論への意見を述べている
- 【結論】
- ⑪読み手に何をしてほしいのか主張・意見が明確に述べられている

〈資料21：意見文推敲のポイント〉

また第2時の作文カンファレンスでの生徒Aの発言の様子を見ると、話し方に自信が溢れており、声も大きくなっていった。それには、第1時の作文カンファレンスが影響している。第1時に課題と意見を伝えた際、生徒Aは他

の生徒から賞賛を受けた。第2時では、根拠となるデータを探し、生徒Aが納得する根拠を見つけることができた。そのため、作文カンファレンスで自信をもって他の生徒に自分の作文について伝えられたと考えられる。実際に生徒Aが作文カンファレンスの効果を感じた場面は、第2時の「根拠・理由付けを検討し合う場面」だった。自分1人では正しいかどうか確認できない内容について、グループのメンバーから「いいね」と評価を受けたことで、作文カンファレンスの効果を感じられたのだろう。賞賛をもらってから、構成や記述に取り組めたことが、意見文への自信に繋がった。生徒Aが、自己評価が高まった理由として挙げていた反論は以下のように書かれている〈資料22〉。

もしかすると「たった一人が節電を心がけただけじゃ、何も変わらない」と思う人もいるかもしれない。しかし、エネルギーを効率よく使い、そのエネルギーの消費量を減らそうと、全国で省エネ活動を呼びかけている。実際に世界のエネルギー消費量は増加しているが、日本のエネルギー消費量が減少してきている。このように一人一人が省エネを心がけた結果が現れているのだ。

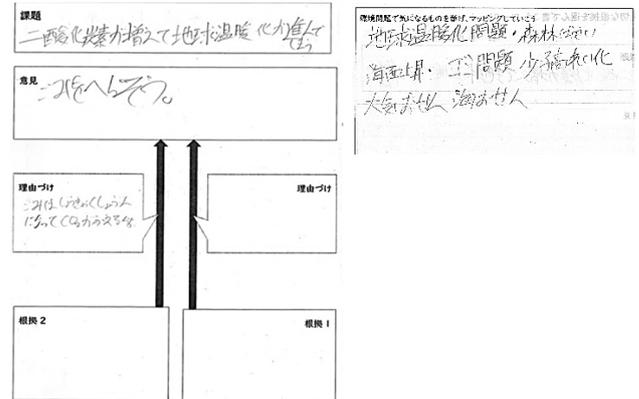
〈資料22：生徒Aの作文の一部〉

自己評価と教師評価を近づけるには、友達からの評価に本人が納得できる根拠が必要である。「推敲のポイント」に即した他者からの評価を得たことが、生徒Aの自己評価向上に影響を与えたと考えられる。

【生徒F：相手意識の向上】

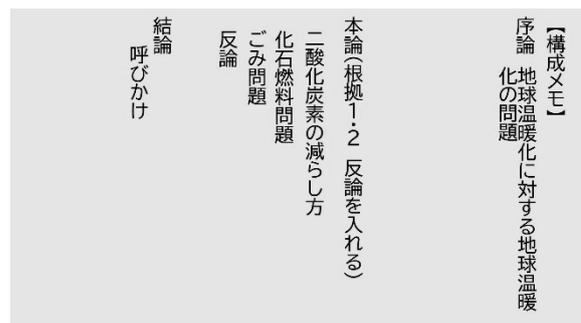
実践Ⅱでは自分の思いを書き、読み手への意識が低かった生徒Fは、実践Ⅲでは読み手を意識した表現を取り入れた意見文を書くことができた。生徒Fは第1時では意見文の課題を「二酸化炭素が増えて、地球温暖化が進んでしまう」に決めたが、意見が決められなかった。しかし、第2時では意見を「ごみを減らそう」、理由付けを「ごみは焼却処分になってCO₂が増えるから」に決めることができた。それには第1時の作文カンファレンスで、他の生徒の意見を聞き、どのような意見があるのか確認できたことが大きく影響している。同じグループの中に「ごみの焼却による大気汚染、埋め立てによる土壌汚染」を題材に選

んだ生徒がおり、その生徒は意見として「ごみを道路などに捨てないようにする」と発表していた。生徒Fは作文カンファレンスと教師が見本に示した記入例を元に意見を決定したと考えられる〈資料23〉。



〈資料23：生徒F ワークシート〉

第2時の作文カンファレンスでは、自分が調べた根拠を「えっと、ゴミが出ると焼却するときにCO₂がいっぱい出ます。」と自信をもって語っていた。第3時にはオクリンク+を用いて構成メモを書いた。作成した構成メモにはどのような根拠を用いて意見文を書くか明記されている。結論に「呼びかけ」を入れていることから、読み手を意識した意見文を書こうとしていることが分かる〈資料24〉。



〈資料24：生徒F 構成メモ〉

しかし第4時の記述では、なかなか書き進めることができなかった。作文カンファレンスをこの時間に行ったが、生徒Fは作文が書けていなかったため、聞き役に徹していた。生徒Fは同じグループの生徒の意見文の書き出しを見て、どのように文章化すれば良いのかを確認していた。その結果、第5時の記述で構成メモに沿って、教師見本や他の生徒の

書き出しをもとに作文を書き進めることができた。授業でねらいとしていた「適切な根拠を選び、それを用いて主張を述べること」、「反論を想定した意見を書くこと」の2点は十分に達成できていた（資料25）。

ワールドを救おう

いま地球は地球温暖化という問題に苦しんでいます。平均気温も年々上昇していき、その上昇幅は21世紀中に1.5度及び2度を超えていきます(最も悪いシナリオでは3.3~5.7度) このままでは異常気象などの災害が増え人間や生き物が住めない星になってしまうかもしれない。もしもこの地球がそんな事にならないようにこの地球を守るために私達などの若者や学生ができることはなんだろうか。

地球温暖化の最大の原因は二酸化炭素の排出の増加である。ある本によると2022年の日本の二酸化炭素の排出量は4億トンでそのうち85%はエネルギーを使うときに排出される二酸化炭素である私達が電気を使えば使うほど地球温暖化が進んでしまうのである。

だが電気を使わずに生活するのはとても難しい。ならどうすればいいか、答えは使い方の工夫をすることだ、中でも特に日常生活で多く使うエアコンの使い方を見直すことが大事です。夏の日に冷房を使いたいときは冷房の温度を必要以上に低くはせずに、その品あった温度調整をするだけで二酸化炭素の排出量を減らすことができます。一人一人の小さな行動が地球の未来を変えることができます他にも地球温暖化にはゴミの問題も関係していてこの世界の大量のゴミの八割を処分する焼却処分をするときに二酸化炭素を排出してしまいます。でも私達にもできることがあります。給食の残食を減らすことでこれもまた小さな1つ1つが積み重なって地球の未来を変えることができる

自分ひとりぐらい大丈夫という考えを持つ人が世界にたくさんいると思うけど、本当はその一人一人の小さなことがこれからこの先の地球の未来をより良くすることができる。例えば給食の残食を完全に減らすことができなくてもそのあとちょっとが大事で他にもエアコンの温度をあとちょっとだけ温度を上げてみるのが大事でそのあなたのちょっとした地球を救うことができる。まずは自分自身が行動することが大切だ。

〈資料25：生徒F 意見文〉

(3) 考察

実践Ⅱでの課題を受け、実践Ⅲでは、作文カンファレンスを単元のどこに入れるのか生徒にアンケートをとった。その結果、生徒が必要とするタイミングで作文カンファレンスが行われ、個人での活動時間も確保できた。実際に実践Ⅱよりも目的をもって作文カンファレンスに取り組んでいる生徒が増えていた。特に生徒自身が作文カンファレンスの効果を感じていたのは第1時の【題材の設定・内容の検討】の場面と第5時の【推敲・記述】の場面である。

第1時の作文カンファレンスで、生徒Cは同じグループのメンバーに自分が思いついた環境問題を複数伝えていた。他の生徒はその発表を聞き、「なるほど」とメモを取っていた。具体的な環境問題が浮かばない生徒もいたが、作文カンファレンスを行うことで環境問題に対してイメージをもてた。また、第1時では、自分が決めた課題と意見の関連性が妥当であ

るかを確認するための作文カンファレンスも行った。第1時の作文カンファレンスが有効だったと答えた生徒はその理由として、「決めたテーマについて自分が知らなかったところを教えてもらうことができた」「課題に対する意見が不安だったけどいいと思うっていう声をたくさんもらって自信を持てた」ということを挙げていた。第5時の推敲・記述では、「文末がおかしいところを気づくことができて、直せた」「反論のアドバイスを貰えた」「アドバイスをもらったことで作文の工夫をもっとすることができた。」との回答があり、自分の作文について具体的な指摘を受けたことで作文カンファレンスの効果を感じられたのだと考えられる。%

意見文に対する自己評価も実践Ⅱより向上している。評価の観点を生徒と共有してから意見文を書いたため、生徒が自分の意見文のできを判断しやすかったと考えられる。また、作文カンファレンスにおいて、生徒同士で推敲でき、よりよい意見文に仕上げられたと実感できたことも影響したと考える。%

Ⅳ 全体考察

1. 作文カンファレンスの影響

「どんな場面で行った交流が、自分の作文に影響を与えましたか。」というアンケートに対して、実践Ⅱでは48%の生徒が「推敲」の場面での作文カンファレンスを選んでいた。実践Ⅲでは3回作文カンファレンスを取り入れた。どの作文カンファレンスでも半数以上の生徒が自分の作文への影響を感じており、第2時に行った「意見と根拠の妥当性を確認する」作文カンファレンスにおいて、全体の74%の生徒が自分の作文に影響を与えたと答えていた。この回答もふまえて、本研究で行ってきた作文カンファレンスが生徒にもたらした変化は次の3点にあった。

（１）文章化への支援

作文カンファレンスを取り入れることによって、今まで作文を苦手としていた生徒が書きたい内容を文章化できるようになっていった。これは作文カンファレンスでグループのメンバーに自分の作文について構想や途中経過、今後どのように書き進めていくかを常に説明していたからである。文章として書くことが難しくても、話すことはできるという生徒は多い。相手に話すことで、わかりにくい部分は質問を受けたりアドバイスを受けていた。相手に繰り返し伝えるうちに自分の書きたいことが明確になり文章化できたのだと考えられる。

（２）アイデアの共有

「書く」上で大きな障壁となるのが、「何を書けばいいのかわからない」ということである。作文カンファレンスでは、作文の構想や今後どのように書き進めていくかも話し合った。特に実践Ⅰの「自分流枕草子」では、生徒Bはたくさんのアイデアを出し、グループの生徒に伝えていた。そのアイデアを聞いて、他の生徒は考えを広げることができた。実践Ⅱ・Ⅲでは生徒Cが自分の考えを伝えたことで、他の生徒はその考えから自分で書く題材を決めることができた。

「書く」過程の中で、定期的に他の生徒の状況を知り、共有できたことで「何を書けばいいのかわからない」という問題を解消できたと考える。

（３）自己評価の向上

作文カンファレンスでは互いに作文を読み合い、感想やアドバイスを伝える。その際によく聞かれた言葉は「いいね」「なるほど」「すごい」「分かる！」という賞賛の声であった。この賞賛を受けながら作文を書き進めたことで、作文に対する自己評価も向上した。特に実践Ⅰでは生徒Bは自分の好きなスイーツを題材に選び、「自分流枕草子」を書いた。作文カンファレンスの中で、他の生徒

から質問を受けたり、生徒Bが工夫した部分を認められたりしていた。自分の作文に相手が興味をもち、自分が工夫した点を評価してくれたことにより、自己評価も向上した。

また、作文カンファレンスでは推敲までに何度も生徒同士で作文を共有した。どう書こうか悩んでいる部分を、他の人はどう書いているのかすぐに確認でき、アドバイスももらえる。1人では自分の作文に自信が持てない生徒も、他の生徒からアドバイスを得ながら書くことで、様々な視点を取り入れながら作文を書けた。相手を意識した作文を書けたことでよりわかりやすい表現で書くことができた。それが自己評価を向上させることに繋がったと考えられる。

2. より効果的な作文カンファレンスにするために

（１）意見をもつ経験

作文カンファレンスでは自分の作文について語る必要がある。そのためには日頃から自分の考えを言語化する経験が必要である。実践Ⅱの意見作文に向けて行っていた帯学習では、毎週身近な話題について生徒同士が話し合うことで、意見をもち言語化する練習を積み重ねることができた。生徒アンケートでも約半数の生徒が「帯学習を通して自分の考えをもつことができた」と答えていた。さらに実践Ⅱでは、生徒Eのように意見作文の題材に、帯学習で扱った題材を選んだ生徒も多かった。また実践Ⅲに向けて、「環境」に関する新聞記事に厳選して、帯学習を行った。実践Ⅲでは約4割の生徒が帯学習の効果を感じており、根拠・理由付けに帯学習での話し合いの内容を活用していた。定期的に多様な情報や他者の考えに触れ、自分の考えを言語化していくことが、「書く」ことにおける考えの形成に役立ったと考える。

（２）指摘・賞賛できる関係

当初、途中段階の作文を見せることに抵抗のあった生徒も、実践Ⅲでは互いに作文を

見せ合い、作文の良い点やアドバイスを伝え合っていた。今回の作文カンファレンスでは、生徒が作文を発表したときに「いいね」「なるほど」「すごい」との感想が多く聞かれた。このように互いのよさを認め合う関係性を、「書く」ことの指導だけでなく、授業のあらゆる場面で育成していくことが生徒の書く能力の向上に繋がると考える。

V 今後の課題

1. 主体性の育成

主体性を育むためには、生徒が自己決定し、その上で成功したという達成感を得ることが必要である。そのために、まず「書く」題材を自分で決定しなければならない。しかし選ぶ題材によって作文の難易度は変わってくる。生徒が書きたいと思った題材であっても、授業での評価を気にして、「書ける」題材を選んでしまう生徒がいる。今後、生徒の「書きたい」という気持ちを育むためにはどのような手立てが必要であるか考えたい。

2. 推敲の技能

作文カンファレンスでは、推敲の場面での実施が有効だったと感じている生徒が多かった。しかし実践Ⅱでは、それぞれ選んだ題材が違ったため、表記面に関する推敲にとどまり、内容に言及できたグループはほぼいなかった。それを受けて実践Ⅲでは推敲のポイントを具体的に確認してから記述・推敲を行った。特に内容面を中心に推敲するよう指示した。その結果、根拠の適切さや主張との関連性など、内容に注目して推敲できたグループが増えた。しかし今度は、表記についての注意が薄れてしまった。さらに誤字脱字には気付けても、文法的な誤りに気付けないことが多かった。表記、内容どちらも推敲することで、伝えたい内容がよりの確に伝わる文章になる。推敲する時間を十分に確保するとともに、生徒の推敲技能を育成していきたい。

引用文献・参考文献

- 1) 堀口史哲(2024)「共同推敲時に働く読み手意識の育成過程に関する研究 ―共同推敲者の批判的思考に着目して―」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』146号, pp163-166.
- 2) 加藤好広、小林一貴(2022)「「問い」の属性の具体化を通じた書くことの学習指導：足場かけワークシートと書くことのカンファレンスを通して」『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究・教師教育研究』第24巻 pp1-10.
- 3) 梶谷真司(2022)『人生を変える文章教室 書くとはどういうことか』飛鳥新社.
- 4) 木村正幹(2006)「作文カンファレンスの発話プロトコル法による構造分析―「作文検討会」導入の試み―」『人文科教育研究』33号, pp45-56.
- 5) 木村正幹(2008)『作文カンファレンスによる表現指導』溪水社.
- 6) 大内善一(2001)『「伝え合う力」を育てる 双方向型作文学習の創造』明治図書.
- 7) 文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編」
- 8) 大島淳・千代西尾祐司(2019)『主体的・対話的で深い学びに導く学習科学ガイドブック』北大路書房.
- 9) ラルフ・フレッチャー、ジョアン・ポータルピー著 吉田新一郎・小坂敦子訳(2007)『ライティング・ワークショップ―「書く」ことが好きになる教え方・学び方―』新評論.